
風花

榛奈 伶奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風花

【Nコード】

N3359B

【作者名】

榛奈 伶奈

【あらすじ】

ある冬の日。ハラハラ舞う風花に寄せる淡い思い

「あれ？ 何か降ってない？」

「ああ、風花だね」

「かざ……？ 何？」

「『かざばな』風の花って書くんだけどね。

今日みたいな冬の晴れた日に降る雪のこと。まるで花びらが舞ってるようだよ？」

「うん……綺麗ね……」

そう言いながら少女は手を差し出していた。その手の上にひらひらと雪が舞い落ちていく。

自分の手の上で儂くとけていく雪を彼女はじっと見ている。その表情には年に似つかわしくないような憂いが潜んでいるようだった。

「どうかした？」

自分の横にいる少女が今にもフツと消えてしまいそうな気がして、彼はささやくような声でそう言っていた。

ささやきかけながらも右手はしっかりと少女の手を握っている。

彼女が消えないように……どこにも行かないようにと……

「どうもしないの……なんか、あんまり綺麗だから……」

そう言って、少女は微笑みながら彼の目をみていた。『何を心配しているの？』とでもいったそうなその瞳に彼は苦笑するしかないようだった。

「なんか、君がどこかに行ってしまういそうな気がするさ。そうやって風花を手を受けてるとさ……」

「なんだ、そんなこと？」

いふなり少女は花のような笑顔を浮かべていた。
クスクスと笑うその姿は今にも雪と一緒に消えていきそうで……

「どうかしたの？」

自分の横でいきなり澄み切った声が響いていた。その声の先には何よりも大切なもの……

あの時、風花を受けていたその手が自分のそばにある。あのときに感じた不安はなんだったのだろう。

「あ……また降ってる……」

「何が？」

「風花」

彼女の声にとつと外を見してみる。たしかにそこにはハラハラと花びらが舞うかのような風花……

「あの時のあなたって、ホント、おかしかったわ」

そういいながら彼女は微笑んでいた。もっとも、それを言われると、彼はいつもバツが悪くなってもいる。

風花を受けていた少女を抱きしめて

「行くな」

といったあの日のこと。

何度もその理由をきかれた。でも、理由はどうしてもいえない。

それはそうだろう。

今にも彼女が消えてしまいそうに見えたからだとは、何があっても言えることではない。

しかし、今のこの時間はそのことがあったから手に入ったともいえるのだろう。心安らげるこのひととき。

外で降っている風花は冬の光を浴びてキラキラと輝いている……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3359b/>

風花

2011年1月16日08時30分発行